

『祭礼の芸能における子どもの役割 一和歌山県東牟婁郡串本町旧古座町一』

要旨

齊藤和枝

日本本州最南端の串本町に合併吸収された旧古座町に伝承されている、国指定重要民俗無形文化財『河内祭』、県指定民俗無形文化財『ねんねこ祭』。地元の『稻荷神社祭の』の三祭について、筆者が1991年から20年間のフィールド・ワークを通して考察し、この地域の村落共同体がこの三祭という伝承芸能を保存する推移を追ってきた。現在、三祭を現状維持している厳しさが加速化してきている実態を考察している。そして、その三祭の核となっている獅子舞と子ども中心とする神事・芸能を取り上げている。子役の持つ役割、重要性、意義、そして価値について記載している。

祭礼における子どもたちがいかに重要な役割を果たしているか、三つの事例で説明していく。

1) 御飯持坐女

赤子に幸をもたらし、夜泣きしないように安らかに育つようお願い、また母乳がよくでるように願いをかけて神の子として「反閤」を繰り返し歩く、神の尸童(よしまし)である。また「反閤」を寒さの中、1時間以上繰り返し、大地の悪霊を鎮め、来る春のために大地を目覚めさせる。この役をやり遂げられる御飯持坐女は、敬意を得る価値がある。神のよしましとして「一つ物」とみなされる。また一步に時間をかけて大地を踏みしめて歩くのは「反閤」といえる。

2) ショウロウ

「生き神様」として崇められるほどの責任感を持ち、猛暑の中、屋台の中で耐えられるだけの忍耐力をもってやり遂げる。7月24・25日の『御舟祭』の主役であるし「一つ物」とみなせる。

3) 小天狗

江戸時代から伝承されている伊勢神楽系の獅子舞がある。その17～18の演目の中で、最も人気のある「天狗の舞」いわゆる小天狗が舞う人気の獅子舞である。その獅子舞は二種類あり、ササラをもって寝獅子を起こそうとする天狗、もう一つは、金の玉をほしがる獅子との掛け合いの獅子舞がある。

いずれも「神の子」「神の使い」として扱われる8歳以下の童子である。祭の中の子どものたちの役は、なくてはならない存在である。しかも主役であることが分かる。子どもは七歳までは神の子として、神代の昔から扱われてきている。

黒田日出男の文を引用すると「七つまでは神の子」とは民俗学が強調する日本の子ども観の原点だ。事実、神仏がこの世に姿を現す(化現する)場合、老人や女性とならんで子供

の姿で現れることが実に多いのである」(黒田 1989:101) のように記載している。

一生に一度、神の子として尊厳があり価値ある役をやってみたいと思う児童は、この地域におけるほとんどの子どもたちの希望である。人々が神になる児童に思いをはせ、人には見えない神を児童に透視し、願いをかなえてくれるものと信じ、生神様を拝む。その子どもたちが主役である二つの祭は、子役の価値を認識し、伝承されてきたのである。子どもの価値は大きければ大きいほど祭を盛り上げるパワーが強くなる。

小さな二つの村落に大きな二つの無形民俗文化財が存在するのも珍しい。しかも田原の『ねんねこ祭』は、日本唯一の子安の祭で、女兒が真冬の早朝暗闇中、大地を一步一步踏みしめ、大地の霊を鎮め、清め、乳児の健やかな成長を願い、母親の母乳がでるように、子供たちの幸せを祈って「神の子」として厳かな儀式を真冬に行う。

もう一つはやはり村落にとって真夏の大きな祭、華麗な舟渡御の『河内祭』を行う。捕鯨、漁業の収穫、農作物の豊作祈願を願って、神の子ショウロウの乗舟する当舟を先頭に、何艘もの船が後に従う舟渡御である。繰り返す述べるが、3キロの川上りが厳正におこなわれ、途中3本の橋も神の子と神額は橋の下を通れないので、三人の船頭に背負われて、三つの橋の上を行くのである。神額も同じで、へりに託されて橋の下をくぐらない。神の子であるから大地に足を下ろすことが出来ないのである。それも祭が終了するまで背負われて行動する。

宮田登の文を引用すると、七歳までの子供について「子供と神との親縁性が前提としてあるからだ。子供が神主だとする思考は、子供が主役で大人がそれを補佐するところに神事が成り立つことを示している」(宮田 1976:198)。「七歳までは神のうち」という表現にもある通りで、子供の成果でも、幼年期から少年期への過度的な不安な状況である」(同掲 194)。

最後まで**神の子**として人間界に幸福、安らぎ、清め、豊穰、豊作をもたらすと信じられているので、毎年子どもたちは自分がこの主役になれることを夢見て観衆の一人としている。このような一日だけ非日常のハレの役をする「ひとつもの」と言ってもよいのではないか。「ひとつもの」とは「祭礼に現れる特別な扮装をした童子や人形。(中略)神霊や祭神のよりしろ」である(日本民俗大辞典下 福原 2000:429)。

この三地域に共通に存在するのが獅子舞である。その中で「天狗の舞」いわゆる小天狗が舞う14～15ある獅子舞の中の人気の演目である。人を引き付け、人々に喜び幸せをもたらす最高の見せ場の舞でもある。観衆はこれだけをお目当てで見に来る人も多い。ましてや主役の小天狗役をやる身内、親族、関係ある人にとっては、地域においても鼻が高い。しかし、逆に子供にとっては、緊張、プレッシャーも半端でないことがうかがえる。

三地域別に天狗の舞のステップを詳しくみてきた。ここで「小天狗の役割について述べてみる。

古座地域における小天狗の役割

- (1) 神への奉納の中で神の子としての役割は大きく、人々に夢、幸福、喜びを与える
- (2) 神の子として穢れの浄化の役割をはたす
- (3) 難しい舞を行うことで子どもたちが自信と責任感と努力の価値を得る
- (4) 指導者の立場になると自分の経験を生かして小天狗の伝承継承につなげている

いずれの共同体でも小天狗の存在価値は大きいことがわかる。一生に一度、小天狗の役を演じることは子どもにとっての誇りであり、また、その場は小共同体の中だけでなく外の見物者も含めた観衆を前にしたパフォーマンスの機会である。それに向かって毎日が練習の積み重ねであり、それが本番への意欲につながっている、と言えよう。

飯島義春氏は「子どもの遊びや行事にはかつて大人が真面目に行なっていた古い信仰や行事が保存され無意識の記録係として過去保存者の役割を果たしていた。一方で、子供は神の代わりに村の家々を訪れて祝福して歩いたり、小正月や盆を中心とする子供組の行事のなかでは異界からの神霊を接待したり罪・穢れを払ってムラを浄化したりする役割も演じた。また祭礼などでは、稚児やヒトツモノとして着飾って馬に乗り神のよりわらの役割をすることも少なくなかった。これは子どもがより神に近い存在として神聖視されていたためであるが、実際に神が憑依しやすく、また罪や穢れには大人ほど敏感ではないという点も挙げられる」(飯島 2000 : 635)。

上記のように、子どもは神と人との中間にいて、大人のことを見聞きして、学ぶ時であり、過去の記録係として過去保存者でもある。また村の行事を通して浄化にも役割を果たしている。また神の憑依を受けやすい神聖な状態であることを示唆している。それを神の尸童(よりまし)としての役割を果たしている。